

# 国家の源流

## 【概要】

4世紀頃、大和(奈良県)地域に大和王権が成立しました。この政権は、大王(オオキミ)を中心として有力豪族で構成されていました。九州北部から関東までを支配し、国内だけでなく中国・朝鮮半島とも積極的に交渉を持ちました。この後、渡来人として中国・朝鮮の人々が一族で日本へ移住する状況も生まれました。

しかし、6世紀末に中国では隋・唐が成立し、朝鮮でも新羅が勢力を持つと、新しい政治制度による強大な軍事力に日本は大きな危機感を持つようになりました。

当時の人々は、この状況に対処するため、新しい政治や文化を積極的に中国や朝鮮半島から取り入れる努力をしました。

この結果、飛鳥の地で律令政治とよばれる体制による中央集権国家、今の日本という国家の源流ともいえる体制が形成され、藤原京、平城京へと続いていくことになりました。

## 【語り部】藤原不比等の紹介

藤原不比等は鎌足の子で、後に大宝律令制定では重責を担い、天武天皇が目指し、持統天皇が引き継いだ中央集権制の成立の中心人物ですが、謎の多い人物です。

壬申の乱の前に鎌足は亡くなり、乱の当時不比等は幼く近江朝側であっても刑罰には問われなかったようです。持統朝時代、31才の時、判事に任ぜられ、正史に登場しました。

聖武朝にかけて各天皇のもと、藤原京、平城京遷都や律令国家確立に向け大事業を次々と行いました。人身位を極め、藤原氏栄華の基礎を固めました。

語ってみよう「国家の源流」。歴史は今につながっている。 By 不比等

### 3, 4世紀の日本

倭国と呼ばれた当時の日本では、前方後円墳と呼ばれる大型の古墳を造った強大な大和王権が、九州北部から関東までを支配していました。

不比等の独り言  
大王の時代

関連寺院、遺跡等

### 東アジアの中の日本

朝鮮半島では伽耶地方の小国が倭国と連携して新羅や百済に対抗するなど、当時の日本は朝鮮半島と深い結びつきがありました。

不比等の独り言  
憧れの東アジア

関連寺院、遺跡等

### 推古朝の政治

592年に推古天皇が即位。翌年、聖徳太子が摂政、蘇我馬子が大臣として政治の主導権を握りました。太子と馬子の連立政権的状况の中で、遣隋使を派遣して積極的に大陸の文化や政治制度の導入をはかり、官僚制度の確立や歴史書の編纂などを行って、中央集権国家としての体裁を整えていきました。

不比等の独り言  
初の女帝

推古天皇のストーリー  
不比等と対談

関連寺院、遺跡等

**大化の改新**  
蘇我蝦夷・入鹿の専横が目にする様相を呈する中、天皇を中心とした国家体制の樹立を画策した中大兄皇子・中臣鎌足らは645年、飛鳥板蓋宮において時の権力者蘇我入鹿を殺害し、さらに父の蝦夷邸を攻撃して蝦夷を自殺に追い込みました(乙巳の変)。年号を「大化」(我が国最初の年号)と定め、難波宮に遷って政治改革に取り組みました(大化の改新)。のち、飛鳥に戻り、斉明期には盛んに土木工事と外征を行いました。663年、朝鮮半島・白村江で唐・新羅連合軍と戦いました。

天智天皇のストーリー  
不比等と対談

不比等の独り言  
父鎌足について

関連寺院、遺跡等

**壬申の乱**  
671年、天智天皇が死去し、翌年、大友皇子の近江朝廷側と吉野に隠棲していた大海人皇子とが皇位をめぐる戦い、大海人皇子側が勝利しました。大友皇子を支持した旧来の大豪族が一掃され、皇室の権威が突出した存在へと変化し、天皇が神格化されることとなりました。

天武天皇のストーリー  
不比等と対談

不比等の独り言  
寂しく怖かった

関連寺院、遺跡等

**飛鳥京の時代**  
壬申の乱に勝利した大海人皇子は672年、飛鳥浄御原宮で即位し天武天皇となりました。皇親政治を展開、「八色の姓」を制定し、「飛鳥浄御原令」の制定や国史の編纂にも着手、律令国家としての体裁を整えていきました。続く持統天皇は、「飛鳥浄御原令」を施行し、「庚寅年籍」「班田制」を実施し、律令政治を具体的に開始しました。飛鳥が京(みやこ/首都)としての役割を担い始める時代だと言えます。

持統天皇のストーリー  
不比等と対談

不比等の独り言  
輝く青春時代

関連寺院、遺跡等

**藤原京の時代**  
持統天皇は、唐の都・長安の都城制にならい、畝傍・耳成・天香久山の大和三山に囲まれた地に、藤原京を造営。694年に遷都し、701年には「大宝律令」が制定されました。中国を手本にした律令国家体制づくりは、藤原京造営をもって完成期を迎えました。

不比等の独り言  
都造りの苦勞

不比等の独り言  
都造りの苦勞

関連寺院、遺跡等

**平城京**  
新しい都として平城京がつくられ、飛鳥・藤原から多くの寺院が移されました。地方は国・郡に分けられるなど統一国家の仕組みが整えられました。

不比等の独り言  
人生に悔い無し

# 仏教の伝来と興隆

## 【概要】

日本では古来、太陽や山などの自然を神々として信じ、素朴な死後の世界を思い描いていましたが、6世紀半ば、仏像や教典が百済から朝廷に送られ、その体系や壮大な仏教の教えに人々は圧倒されました。

仏教を信じるか信じないか、日本古来の神々を信じる人々と新しい仏教を信じる人々の間で、激しい戦いが繰り広げられました。

やがて、仏教を信じる聖徳太子や蘇我馬子が主導権を握ると飛鳥地方を中心に、仏教文化が栄えました。

以後、仏教は日本の政治や文化に大きく影響を与えることとなりました。

## 【語り部】道昭の紹介

653年、遣唐使の一員として中国へ渡り、玄奘(三蔵法師)の弟子になりました。

660年頃、帰朝。この時多くの經典類を持ち帰りました。法興寺(別名飛鳥寺・元興寺)の一隅に禅院を建立して住みました。天武天皇からも信頼されており、晩年は全国を遊行し、各地で土木事業を行いました。

700年に没し遺命により、日本で初めて火葬に付されました。弟子に行基がいます。

語ってみよう「仏教の伝来と興隆」。仏教は、ここに花開いた。 By 道昭

### カミの崇拝

カミ(自然や先祖)の崇拝による祈願祈念とその結果が政や生活の指針となっていました。

### 道昭の独り言

現在に生きる神々

関連寺院、遺跡等

### 崇仏論争

552年、百済聖明王からの「仏教公伝」を受けて、仏教信仰推進派の蘇我稲目と仏教排除派の物部尾輿が対立しました。敏達天皇・用明天皇の相次ぐ病死で排仏派の物部氏が優勢となりましたが、次期天皇擁立をめぐる政争から蘇我馬子・厩戸皇子が物部守屋を討ち、崇仏派の蘇我氏が主導権を握るようになりました。

### 道昭の独り言

尼への道

蘇我稲目のストーリー  
道昭と対談

関連寺院、遺跡等

### 仏教興隆策

592年に推古天皇が即位。聖徳太子が摂政、蘇我馬子が大臣として政治の主導権を握りました。飛鳥寺や法隆寺など各地に寺院を建立したり、朝鮮半島から僧を招いたり、役人に仏教信仰を奨励したり、と仏教興隆を国策として推進していきました。

### 道昭の独り言

立ち並ぶ五重塔

聖徳太子のストーリー  
道昭と対談

関連寺院、遺跡等

### 古墳の終末

646年の薄葬令や仏教伝来に伴う死生観変化、寺院建設の流行などにより、権力の象徴であった古墳築造が衰退していきました。

### 道昭の独り言

火葬の決意

関連寺院、遺跡等